

探究的な学習活動の実践事例集



令和2年1月

北海道教育庁学校教育局高校教育課

目次

はじめに

1	情報・環境・福祉・健康など持続可能な社会の実現に関わる課題についての取組事例	
(1)	北海道滝川高等学校 持続可能な社会を築く科学技術系人材に求められる資質・能力を育成する「総合探究」	1
(2)	北海道札幌啓成高等学校 「人がよりよく生きるとはどういうことか」 啓成普通科Future Vision	2
(3)	北海道北見北斗高等学校 地域連携による研究成果のアウトリーチ	3
2	英語を通じた思考力、判断力、表現力の向上など国際社会に関わる課題についての取組事例	
(1)	北海道登別明日中等教育学校 大学との連携によるワークショップ	4
3	産業振興をテーマとして地域や学校の特色に応じた課題についての取組事例	
(1)	北海道滝川工業高等学校 パーソナルモビリティへの挑戦～ユニバーサルツーリズムを目指して～	5
(2)	北海道余市紅志高等学校 農業の高度化・6次産業化への貢献～北のフルーツ王国ワイン特区と連携した町づくり～	6
(3)	北海道函館水産高等学校 地域水産資源の活用による地域鉄道路線や沿線水産業の活性化	7
(4)	北海道旭川農業高等学校 地域連携機関との協働による未来のプロフェッショナルの育成	8
(5)	北海道標茶高等学校 「しべパフェ」で元気な町づくりプロジェクト	9
4	観光をテーマとして地域や学校の特色に応じた課題についての取組事例	
(1)	北海道札幌東商業高等学校 語学力を生かしたホスピタリティマネジメントとコミュニケーション	10
(2)	北海道小樽未来創造高等学校 郷土の歴史・文化に対する地域への情報発信	11
(3)	北海道礼文高等学校 地域の水産資源を活用した観光資源の開発	12
(4)	北海道釧路商業高等学校 地域に根ざしたグローバル人材の育成	13

はじめに

平成30年3月30日に告示された高等学校学習指導要領では、生徒が知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたりすることなどを重視した学習の充実を図るための実現に向けた授業改善が求められています。

今回の改訂では、高等学校において、小・中学校における総合的な学習の時間の取組の成果を生かしつつ、より探究的な活動を重視する視点から、「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に変更されました。

また、各学校において定める目標及び内容については、実生活や実社会で生きて働く資質・能力を育成するため、地域や社会との関わりを重視することとなっています。

こうしたことを踏まえ、持続可能な社会の実現や、国際社会に関わる課題、地域や学校の特色に応じた課題などに取り組んでいる学校の事例を取りまとめ、本事例集を作成いたしました。

各学校においては、本事例集を参考にし、生徒が未来社会を切り拓くための資質・能力を身に付けることができるよう、地域の実態等に応じた創意工夫あふれる地域課題探究型のキャリア教育を推進していくことを期待しています。

令和2年1月

北海道教育庁学校教育局高校教育課長

藤 村 誠

持続可能な社会を築く科学技術系人材に求められる資質・能力を育成する「総合探究」

北海道滝川高等学校（生徒数683名、学級数18学級）

■ ねらい

本校は「スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）指定校」として、持続可能な社会を築く科学技術系人材の育成を目指し、求められる資質・能力を次の「8つの力」と定義してこれらの力の育成を図っている。その中核を担っているのが、探究学習を中心とした学校設定科目「フロンティアサイエンス（Ⅰ～Ⅲ）」（理数科）と「総合探究（Ⅰ～Ⅲ）」（普通科）である。

〔育成したい資質と能力 ⇒ 「8つの力」〕

- | | | |
|---------|-------------------|---------------|
| 【考え抜く力】 | ① 言語を活用する力 | ② 知識・情報を活用する力 |
| | ③ 課題を見出す力 | ④ 課題を解決する力 |
| 【協働する力】 | ⑤ 議論する力 | ⑥ 他者と協働する力 |
| 【生き抜く力】 | ⑦ 自ら振り返り自己を変容させる力 | ⑧ 挑戦する力 |

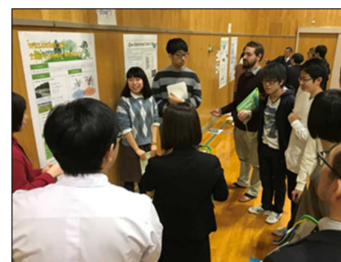
■ 実践例

○ 取組の背景

SSH第Ⅰ期（平成25～29年度）において、普通科における探究学習の取組に課題が見られたことから、SSH第Ⅱ期においては、全校的な指導体制を構築し、理数科だけでなく普通科においても課題探究を通して育む資質・能力を明確にし、取組の改善を図ることとした。

○ 取組内容

普通科・理数科ともに、1年時に、探究活動に必要な基本的な技能を身に付けるため、「探究基本ドリル」に取り組み、課題発見や課題解決の手法を学ばせている。普通科においては、SDGsをテーマに、1年時は個人で、2年時はグループで課題設定を行い探究学習に取り組んでいる。理数科では、これに加えて、数値や情報を的確に処理する技能や英語でのプレゼンテーション技能を学び、ポスター制作や研究論文の執筆を行っている。3年時には、普通科・理数科ともにクラス発表と全校での発表会を開催し、生徒による相互評価を行っている。



2年時の英語プレゼンテーションの様子

課題の設定に当たっては、生徒の主体性を尊重しつつ、各種講演会や「課題探究のテーマに出会う朝読書週間」を設け、生徒の課題意識を醸成している。特に、理数科では、多くの体験型授業（フィールド巡検、環境学習リーダー養成実習等）を実施し成果をあげている。

■ 取組を通じた生徒の変容

「SSH生徒アンケート」（平成31年1月実施/全校生徒対象）の一部

アンケート項目	理数科	普通科
課題に対する論理的思考力が向上した	72%	47%
思考力・判断力・表現力が身に付いた	76%	53%
地域研究に関するSSH活動に参加したい	67%	40%

※ 数値は「概ねそう思う」以上の合計数の割合
SSHの探究学習に重点的に取り組む「理数科」の方が肯定的な評価が多く、課題を解決する力や挑戦する力の育成に効果があったと考えられる。

ここがGOOD！

#取組の成果を数値化し、全ての項目で良い効果が表れている

■ 指導上の留意点

- 生徒が探究学習に必要な技能を確実に習得し、効果的に活用するために、教師主導の学習から生徒主体の学習へと移行させる、3年間を見通したプログラムを作成すること。
- 探究学習は、担任など一部の教員が担当するのではなく全校体制で行うこと。
- 探究学習の目標を教師・生徒間で共有するとともに、評価項目や評価規準、評価場面を事前に生徒へ提示すること。

ここがポイント！

#3年間を見通して取り組んでいる

#取組における評価規準を事前に生徒へ提示している

「人がよりよく生きるとはどのようなことか」 啓成普通科 Future Vision

北海道札幌啓成高等学校（生徒数944名、学級数24学級）

■ ねらい

- ・一人一人の生徒が自分のよさや可能性を認識する。
- ・あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越える。
- ・豊かな人生を切り開き持続可能な社会の創り手となる。

■ 実践例

○ 取組の背景

私たちの実世界・実生活では、様々なすれ違いや衝突が見られる。その中には「対話」が有効に働けばよりよく進んでいけるものがあると考える。「対話」の力を高めることにより、生徒一人一人がよりよい未来を生きていくことができると考え取り組んだ。

○ 取組内容

- ・1年生は宿泊研修で高校生活の目的、目標を設定する活動から探究学習がスタートする。教科「情報」では情報社会について探究し（総合学習と教科学習の往還）、夏休みの課題では各領域の識者が書いた文章を要約、反論する課題に挑戦する。9月からの半年は「人がよりよく生きるとはどのようなことか」をテーマとした個人探究に取り組む。
- ・2年生は「自分で問いを立てる生徒」「本校教員のゼミに参加する生徒」「外部アドバイザーが設定する講座に参加する生徒」の3パターンに分かれて探究する。
- ・2月には理数科も含めた全校生徒のポスターセッションである「学術祭」を開催し、教育関係者、保護者等にも来校いただき多様な人々との対話を実現している。

#全校生徒で成果を共有している

ここがポイント！

(第1学年「総合的な探究の時間」において30時間配当)
(第2学年「総合的な学習の時間」において27時間配当)



「学術祭」の様子

○ 地域(関係機関等)との連携体制

- ・外部アドバイザーは高等教育機関（北大、教育大等）、自治体や社会教育施設、企業やNPO法人などが務める。加えて、登録制で学生や卒業生がメンター、ファシリテーターとして授業に参加する。対話などの場面で、担当教員と連携しながら探究活動の活性化を図っている。

■ 取組を通じた生徒の変容

- ・豊かな社会的経験と専門的な知識を持った外部アドバイザー、学生メンター、ファシリテーターとの対話を通して、多様な価値観を知ることができ、本校生徒の探究心、創造力、想像力に大きな刺激を与えている。 ここがGOOD！ #多様な人との対話が刺激を与えている
- ・自分が認識できる世界の広さ、視野の広さの外の世界があり、別の生き方や考え方があることを知って、未来への可能性や将来への選択肢を広げている。

■ 指導上の留意点

- 探究学習のねらいを考えると、外部の専門家、実務家、また現役の大学生、大学院生の支援は欠くことができない。外部連携によって教育効果や学びの質を高めるためには、授業を支援する人たちと学習者との共創価値を共有する時間、機会の確保が重要となる。

地域連携による研究成果のアウトリーチ

北海道北見北斗高等学校（生徒数706名、学級数18学級）

■ ねらい

地域との連携により、研究成果を効果的にアウトリーチすることを通じて、生徒の知識を深め、思考力・判断力・表現力を高めるとともに、社会参画意識を向上させる。

■ 実践例

○ 取組の背景

- 本校では課題研究の成果を発表会や研究ポスター展示を通して保護者や市民に広報し、SSHの活動内容の理解を図っているところであるが、研究成果の普及を踏まえると、こうした発表の機会だけでは不足しているため、関係機関と連携して研究成果を社会に広くアウトリーチする必要があった。

○ 取組内容

- サイエンスクラブは、2017年から、産学官連携による水環境保全シンポジウム「水ミーティング」を主催している。「水ミーティング」では、常呂川に関わる企業や団体（㈱クノール、林野庁、北見市上下水道局、北見工業大学等）が参加して活動発表を行っており、この発表とともに、サイエンスクラブの常呂川調査や河川ごみ調査の取組を発表している。



「水ミーティング」の様子

- これまで、高文連理科大会や科学系コンテストに限られていた成果発表の場を、市民対象のイベントである「水ミーティング」での発表に拡大した。

ここがポイント！

#市民対象のイベントを活用して効果的に広く取組を発信している

- 「水ミーティング」には、環境問題に関心を持つ市民が集まり、本校の発表に対して、活発な質疑応答が交わされるなど、専門家を含む市民と高校生の意見交流の場にもなっている。

■ 取組を通じた生徒の変容

- 事後アンケート（運営生徒18名対象）の設問及び回答結果より紹介する。
※回答結果 [%] の数値は、「とても当てはまる」、「当てはまる」の合計。
 - Q「市民の水環境保全意識を高めるといった目的を果たすことができた。」[100%]
 - Q「イベント運営や企画をもっとやってみたいと感じるようになった。」[88.9%]
 - Q「水環境に関する興味が高まった。」[88.9%]
 - Q「水環境に関する知識が深まった。」[94.4%]
- 2019年度、サイエンスクラブの部員の中から、北見市のSDGsに関わる委員会及び市民との協働によるビオトープ調査に参加する生徒や、北見市在住の絵本作家のアドバイスを受けて「環境絵本」を作製する生徒が現れた。また、サイエンスクラブは、北見市及び企業と協働でリサイクル活動を開始するなど、生徒が積極的に社会に参画するようになった。

#主体的に社会に参画しようとする意思が育まれている

ここがGOOD！

■ 指導上の留意点

- 「水ミーティング」などの連携事業の実施に当たり、関係機関との連絡調整においては、主に教員を窓口（一部は生徒が担当）としているが、教員主導により、生徒の主体性が損なわれぬよう留意し、生徒が積極的に参画するための方策を検討していく必要がある。
- 様々な立場や幅広い年齢層の方々と接する機会が増えるため、対応に関する基本マナーや話し合いの作法などを生徒に理解させる必要がある。

大学との連携によるワークショップ

北海道登別明日中等教育学校（生徒数225名、学級数6学級）

■ ねらい

- ・グローバル・リーダーとして求められる「国際的な対話力」、「課題解決力」、「情報発信力」の育成と、経済や環境、地域振興などについて多角的に考察する力を育成する。

■ 実践例

○ 取組の背景

- ・「地域や世界の食糧問題」をテーマとして、北海道や世界に提案する解決策を考える探究活動を行うため、生徒自身で探究課題を決定する手法等について学ぶ必要があったこと。

○ 取組内容

酪農学園大学と連携し、「仮説の立て方」と「研究手法」について学んだ。

（H29年度4回生の「総合的な学習の時間」において6時間配当）

(1) 全体会（ワークショップ①）

- ・「農業と環境問題」など、7つのテーマに関するミニクイズに対して、グループで話し合いながら解答することを通して、各テーマについて新たな発見をした。

(2) 分科会（ワークショップ②）

- ・テーマごとに分かれ、課題探究のプロセスである「課題発見」（テーマ決定）の手法について、ゼミ形式で学んだ。

【作業1】ペアで課題や背景を分析する

資料（数値等）をグラフにして「見える化」することで、「どのように推移しているか」、「その原因・背景は何か」といった読み解きを行った。

【作業2】アイデアを出し合う

ペアワークで分析した課題をグループ内で共有し、「ジグソー法」や「KJ法」を用いて、調査・解決のための具体的な方法を考えた。

【作業3】作業する上での課題を明確にする

グループごとに出された調査・解決方法について順位付けを行い、取り組む作業についての課題及び課題探究の方向性について話し合った。

これらの取組を通して情報収集力や整理・分析力を身に付けるとともに、それらの力を活用して、北海道の農業の課題や世界の食糧問題をテーマとした探究型学習を行った。また、海外研修やイングリッシュキャンプ等の取組を通して、積極的にコミュニケーションを図る態度や英語で対話する表現力を育成した。



■ 取組を通じた生徒の変容

（平成29年度4回生（平成30年度5回生）対象のアンケート結果より）

- ・「自分のふるさとや北海道について、日本語や英語で世界の人たちに紹介できる」
【H29年9月（4回生時）】40.0%→【H31年2月（5回生時）】64.2%
- ・「データや情報をもとに自分の考えをまとめることができる」
【H29年9月（4回生時）】81.5%→【H30年2月（4回生時）】91.8%
- ・アンケート結果から、「国際的な対話力」、「課題解決力」、「情報発信力」の育成を図ることができた。
- ・「地域や世界の食糧問題」をテーマとした取組から、生徒が主体的に北海道の農業の強みや弱みを分析し、今後の本道農業の方向性について、考察することができた。

#北海道の基幹産業について主体的に考えている

ここがGOOD!

■ 指導上の留意点

- ・生徒による主体的な探究活動にするため、担当教員は生徒の考えを否定せずに、各自の課題を解決する環境を整えるなどして、アドバイザーに徹する必要がある。

#生徒の主体的な探究活動を促すための指導が工夫されている

ここがポイント!

パーソナルモビリティへの挑戦～ユニバーサルツーリズムを目指して～

北海道滝川工業高等学校（生徒数167名、学級数6学級）

■ ねらい

- ・地域と地域産業に対する理解を深め、地域社会に貢献する態度を育成する。
- ・地域の人々と協働しながら、地域の課題の解決に必要な知識及び技能を身に付ける。
- ・地域貢献の取組に係る情報を効果的に伝える力を育成する。

■ 実践例

○ 取組の背景

市街地や農業地域における高齢化が顕著な滝川市において、交通弱者のための移動手段として活躍が期待されるパーソナルモビリティ（交通弱者の移動手段として使用できる、カート等の運転免許を必要としない小型電気自動車）の実用化に向けて、観光資源を活用しながら、地域産業の活性化とともに、安心・健康で永く暮らせるまちづくりの実現を目指す。

○ 取組内容

パーソナルモビリティを開発し、滝川市を代表するイベント「菜の花まつり」等で活用するなど、ユニバーサルツーリズムの普及を通して、市が構想する「コンパクトタウン」の一翼を担う取組につなげる。（科目「課題研究」において3時間配当）



「工業クラブ大会」における発表



パーソナルモビリティ製作



広報班によるポスター製作

○ 地域（関係機関等）との連携体制

地域（滝川市）の観光促進に向けて、滝川市や滝川国際交流協会と協働してアンケートの実施を通して、課題を共有したほか、調査結果に基づいた研究を進めるなど、ユニバーサルツーリズムの普及促進に向けて取り組むことができた。

パーソナルモビリティの開発に向けて、連携企業から研究材料の提供や技術指導を受けたほか、連携大学等から、開発したカートを実際の場面で使用し、実用化に向けての問題点等について指導・助言を受けることができた。

■ 取組を通じた生徒の変容

- ・「工業高校生として、地域のために何ができるか」について、生徒に自ら問いかけることからスタートし、地域の課題を分析することで、どのような解決方法があるか試行錯誤を繰り返してきた。生徒からは、「学んだことを地域の活性化に役立てたい」という前向きな発言が聞かれるなど、協働して課題解決に向かう姿勢を育むことができた。

ここがGOOD！

#地域に貢献しようとする気持ちが育まれている

- ・連携企業等からの指導により、「金属の加工技術が上達してきた」等の評価をいただくなど、将来、企業等で活用できる高度な知識や技術を身に付けることができた。
- ・「地域みらい連携会議」等において、生徒が取組をプレゼンする機会を増やしたことで、相手に分かりやすく伝えるための表現力を身に付けることができた。

■ 指導上の留意点

- ・生徒の発想を生かすとともに、生徒自身が課題解決のために必要な方策を常に問い続ける姿勢を持てるよう、働きかけることが重要である。

ここがポイント！

#生徒が主体的に課題を解決することができるよう工夫されている

- ・探究的な学習活動を全校的な取組とするため、現在の取組状況を積極的に地域に情報発信し、学校と地域の連携を密にして、地域の期待に応えることのできる取組とする必要がある。

農業の高度化・6次産業化への貢献～北のフルーツ王国ワイン特区と連携した町づくり～

北海道余市紅志高等学校（生徒数121名、学級数5学級）

■ ねらい

- ・探究的な学習活動を通して、地域の課題を発見し、課題の解決に取り組むことにより、地域への関心を高め、地域で活躍できる人材を育成する。

■ 実践例

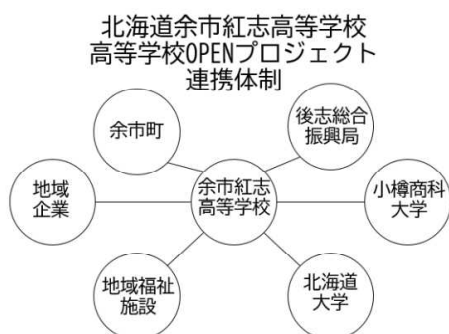
○ 取組の背景

- ・余市町が「北のフルーツ王国ワイン特区」に認定されたことから、企業の参入や観光客が増加傾向にあり、地域の持続的な発展に向けた農業・福祉・観光振興の取組が求められている。

○ 取組内容（「総合的な探究の時間」18時間配当）

- ・本校の農業系列の生徒を中心に、次のとおり、5つの研究班を設置した。
農業班…ワインブドウ栽培の高度化へ向けて、切断した木の一部を植えた挿し木による自根苗、接ぎ木苗、ウイルスフリー苗の生産研究を通じて苗不足に対応できる生産技術の習得に取り組む。
福祉班…ワインツーリズムを障がい者も楽しめるよう、地域や農場のバリアフリー化研究に取り組む。
観光班…地域のビュースポット発掘を通じて地域の観光資源の発掘に取り組む。
多言語班…インバウンドの受入れに向けて、地域の案内表示等の多言語化に取り組む。
交通班…観光客の来町方法を調査し、鉄道を中心とした人の流れをつくる交通体系の考案に取り組む。

○ 地域（関係機関等）との連携体制



<道の駅での聞き取り調査の様子>

■ 取組を通じた生徒の変容

- ・探究的な学習活動に取り組むことにより、6割の生徒が地域の問題を理解し、5割強の生徒が地域への関心を高め、7割近くの生徒が課題解決に取り組むたいと回答した。
- ・本取組については、8割の生徒が「将来に役立つ」と考えており、地域課題を解決する学習に取り組むことにより、地域への関心が高まり、自らの将来を肯定的に考えることができるようになった。

ここがGOOD!

#地域に貢献しようとする気持ちが育まれている

[生徒の声]

- さまざまな苗の生産技術など、高校の水準以上の専門的な知識や技術を知ることができて良かった。

■ 指導上の留意点

- ・取組の充実のためには、民間企業や専門家との連携が不可欠であるが、都市部からの距離など、地理的特性により制約を受けることもあるため、ICTを活用した連携のほか、行政の支援を得て地域人材の発掘を積極的に行うことが重要である。

ここがポイント!

#地理的なデメリットをICTの活用などで克服しようとしている

地域水産資源の活用による地域鉄道路線や沿線水産業の活性化

北海道函館水産高等学校（生徒数429名、学級数12学級）

■ ねらい

- 本研究を通じ、地域が抱える課題や将来生徒が直面する課題に対して見通しを持ち、地域の活性化に寄与できる体験の場を設定するなど、生徒の基礎的・汎用的能力を育成する。

■ 実践例

○ 取組の背景

- 地域に密着している道南いさりび鉄道を本校生徒の約40%が利用している。
- 地元からは、近年水揚げが増加したブリの加工研究を行い、成果を還元してほしいとの要望がある。

○ 取組内容

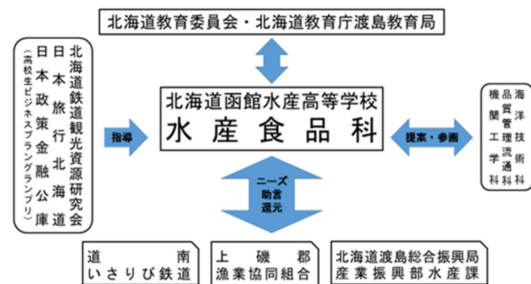
- 道南いさりび鉄道とのコラボ企画として、本校の生産物を、道南いさりび鉄道の車両内で販売。（「課題研究」35時間配当）
- ブリ加工について、渡島総合振興局、函館市、北海道立工業技術センター及び水産加工業者等を対象に缶詰試作の成果発表会を実施（「課題研究」35時間配当）



鉄道での車内販売

○ 地域（関係機関等）との連携体制

- 「道南いさりび鉄道」からは、列車内や駅等での企画に対する助言、「上磯郡漁業協同組合」からは、水産資源の提供や加工への助言、「渡島総合振興局産業振興部水産課」からは、渡島管内の水産資源の動向や加工への助言、「日本旅行」からは、企画プランニングについての指導助言をいただいている。



■ 取組を通じた生徒の変容

- 地域の課題と学校の課題を重ね合わせ、地域の課題を一層身近なものとして捉えて取り組んだことから、「課題対応能力」を高めるとともに、さまざまなプレゼンテーションや地域イベントへの参加を通して、「自己理解・自己管理能力」を向上することができた。

ここがGOOD!

#身近な問題を地域課題に関連付け、解決を図る取組を進めている

- 1年という短いスパンのため解決まで至らないこともあったが、単年度の目標を設定するとともに、課題解決に取り組むこと自体の意義を伝えることにより、生徒からは、「もう少し時間がほしかった」、「もっと活動をしたかった」という声があるなど、生徒の探究心を高めることができた。

■ 指導上の留意点

- 生徒が当該連携機関をはじめとする地域の企業や高等教育機関に積極的に関わり、企画提案するなど、地域の課題解決に向けた取組を通して、達成感や自己有用感、自己肯定感を育むことが重要である。
- 生徒の変容を計るため、事後アンケートのほかに中間アンケートが必要である。

ここがポイント!

#高校生の発想を大切に生かそうとする取組を行っている

#生徒の変容を詳しく知るため、中間アンケートの実施について検討している

地域連携機関との協働による未来のプロフェッショナルの育成

北海道旭川農業高等学校（生徒数479名、学級数12学級）

■ ねらい

林業・林産業さらには地域コミュニティを持続的に発展させることができる将来のプロフェッショナルを育成する。

- 身に付けさせたい資質・能力
 - ・専門性の基礎・基本
 - ・勤労観・他者理解・コミュニケーション能力・創造力
 - ・課題発見解決能力

■ 実践例

○ 取組の背景

上川地域は林業・林産業を基盤産業とする地域が多いが、木材需要量や価格の低迷は、生産性低下や担い手不足を生み、森林資源循環利用サイクルが機能しなくなっている。

○ 取組内容

- (1) 目指す生徒像に達成するためのカリキュラム・マップの公開
カリキュラム・マップにより目指す姿の可視化を図り、学習体制を整備する。
- (2) 林業・林産業理解プログラムの開発（ステップ1）
森林の役割や生態、林業・林産業の文化、歴史、地域での暮らしについて、視察・研修などを含めた調査、研究、発表を行い、理解を深める。
〔「農業と環境」などで18時間配当〕
- (3) 林業・林産業体験プログラムの開発（ステップ2）
下川町育林実習、高性能林業機械体験、インターンシップなど、協働研究を通して、高度な知識や技術に直接触れる。
〔「課題研究」などで74時間配当〕
- (4) 地域課題解決プロジェクト学習の展開（ステップ3）
 - ア 高大連携プロジェクト（2年生）
北海道大学・上川町と共同研究により、プロジェクトの進め方を学び、知的な好奇心を高めて、課題発見力を育成する。また、データを集計・考察後に発表し、論理的な課題解決能力を身に付ける。
〔「森林経営」などで6時間配当〕
ここがポイント！ #関係機関との共同研究を通して、生徒の資質・能力を高めている
 - イ 林業・林産業ワークショップ（2・3年生）
林業・林産業を理解・普及のために行い、コミュニケーション能力を高め、自己の知識・技能の定着を図る。
〔「総合実習」などで9時間配当〕
 - ウ 森林資源の循環利用に関わるプロジェクト（2・3年生）
森林資源の循環利用を推進するため、方策について外部連携機関と協働する。
〔2学年「総合実習」で38時間、3学年「総合実習」で48時間配当〕

■ 取組を通じた生徒の変容

- ・林業・林産業に関する就職・進学を選択した生徒が60%を超え、地域の林業・林産業を発展する人材を輩出できている。

[生徒の感想]

- ・「森林が循環している」という当たり前のことが全く分かっていなかったが、林業・林産業の知識を、プロに指導されながら作業や調査研究をすることで理解することができ、そういった人たちの関わりで自分が成長できたと思う。

ここがGOOD！

#専門的な職業人から指導を受け、知識・理解を深めている

- ・林業の大変さや木に対する意識がより高まり、今後、木を大切にしていこうと思った。

■ 指導上の留意点

- ・連携機関と打合せし、生徒へ事前指導を丁寧に行う。終了後は速やかに事後指導を行う。
- ・万が一事故等を想定し、対応策や保険も含め、外部連携機関と協議しておく。

「しべパフェ」で元気な町づくりプロジェクト

北海道標茶高等学校（生徒数215名、学級数6学級）

■ ねらい

- ・商品開発に当たっての科学的思考力及び目的や戦略、推論、検証等の企画力・実践力の習得を目指す。
- ・多角的に物事を見る観察力、思考力及び新たな価値を見いだす創造力の習得を目指す。
- ・主体的・対話的な学習場面を通じた課題解決能力の習得を目指す。

■ 実践例

○ 取組の背景

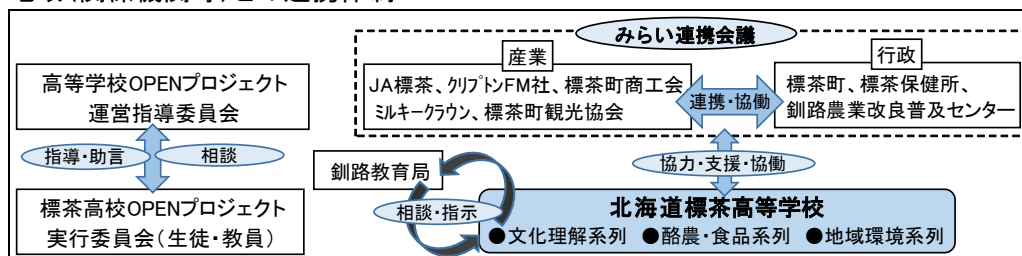
本町からの若者の流出は、標茶町の人口減に拍車をかけ、産業振興という点で深刻な課題となっている。そんな中、標茶町全体での6次産業化を柱にした町の活性化及び魅力づくりに向け、標茶高校の製造技術とその教育力を生かした製品開発力に着目した。

○ 取組内容

- ・「しべパフェ」の考案～「しめパフェ」を考案した、クリプトン・フューチャー・メディア社の協力により、「しめパフェ」と「標茶」を組合せた「しべパフェ」を発売し、企業や関係機関と連携して、「しべパフェ」のイメージを決定。（「総合的な学習の時間」において18時間配当）
- ・学校祭での販売による取組の紹介～「うしべパフェ」「しべまっちゃ」180食を販売したところ、40分で完売。（「総合的な学習の時間」において6時間配当）
- ・JR応援活動～「くしろ湿原ノロッコ号30周年自治体PRデー」において、「しべパフェ」に使用するアイスを提供し、観光客など400名に対して酪農の町標茶とパフェの取組をPR。（「総合的な学習の時間」において4時間配当）
- ・標茶町産業まつりでの町民への取組周知～みらい連携会議の企業からキッチンカーの提供を受け、「しべパフェ」400食を販売したところ、3時間で完売。（「総合的な学習の時間」において6時間配当）
- ・町民意識の調査～ニーズを探るため、パフェについて販売会でアンケートを実施。（「総合的な学習の時間」において6時間配当）
- ・みらい連携会議への参加～定期的に開催される会議で高校生としての意見具申。（「総合的な学習の時間」において6時間配当）



○ 地域（関係機関等）との連携体制



■ 取組を通じた生徒の変容

※文中の（ ）は生徒自己評価のコメント抜粋

- ・地域をイメージしたパフェの企画と開発に当たり、課題の掘り下げや市場調査等の実践により開発のための科学的思考、買い手の動向観察、市場展開のための戦略及び明確なビジョンを持ったストーリーのデザイン力を身に付けた。（町の課題の根深さを知る一方で、このパフェを柱とした町おこしの協定が締結されるなど、しべパフェの可能性にワクワクする。）

ここがGOOD！ #商品開発の科学的思考力やデザイン力を関係機関とともに育成することにより、生徒の関心を高めている

- ・みらい連携会議や企業研修等に参加しながら商品のデザイン化を進める中で、新たな価値を見いだす創造力を身に付けた。（市場調査を通して、商品が持つ顧客を感動させる力の大きさに驚いた。）
- ・本プロジェクトの地域への浸透や取組の普及を図る中で、主体的行動力と周囲との協働の姿勢を身に付けた。（関係機関の例会に参加して活動計画を伝えるなどの経験から、人に伝えるには少しずつ同じ志を持つ仲間を増やすための地道な活動が必要だと感じる。）

【生徒自己ルーブリックによる全体評価(C・B・A・S)→ (H30.10 B) (H31.2 B) (H31.4 A) (R1.6 A) (R1.8 A)】

■ 指導上の留意点

- ・探究活動において、自己の生き方や将来を意識して活動を展開することができるようキャリア形成に関連付けることが重要となる。
- ・本プロジェクトが高校生の活動で完結するのではなく、地域全体の取組となるよう、学校が標茶町との連携をコーディネートしていく必要がある。

ここがポイント！

#学校全体の積極的な取組姿勢が表れている

語学力を生かしたホスピタリティマネジメントとコミュニケーション

北海道札幌東商業高等学校（生徒数944名、学級数24学級）

■ **ねらい**

- ・観光ビジネスにおけるホスピタリティの概念と重要性を理解し、場面に応じた適切なビジネスマナーの実践力及びコミュニケーション能力を育成する。

■ **実践例**

○ **取組の背景**

- ・地域社会と連携し主体的に問題解決力及び実践力を養う教育活動が求められる。
- ・観光立国の流れを踏まえ、観光に関する知識と技術を習得させ、観光の振興に取り組む態度を育成することが求められている。

○ **取組内容**

科目「ビジネス基礎」 2時間配当	科目「ビジネス英語」等 3時間配当	科目「ビジネス経済応用」 2時間配当
		
ホスピタリティをテーマに 大学教授による講演を実施	観光関連産業及び外国語に ついての体験活動を実施	航空業界のビジネスについ ての講演と調べ学習を実施

科目「観光ビジネス」で指導可能！

○ **地域(関係機関等)との連携体制**

- ・各専門分野の教授を招聘し講演会を実施（北海商科大学との高大連携）
「北海道経済とアジア経済の結び付き」の講演を実施することにより、訪日外国人を対象とした観光ビジネスにおける経済効果を理解した。

- ・厚別区役所との連携
区役所主催の地域イベントにおいて
英語、中国語、韓国語のチラシを作成することにより、訪日外国人へのイベント周知を図るとともに、外国語の技術を向上させた。

ここがポイント！

#訪日外国人向けのチラシ作成を通して、複数の外国語を学ぶことができる



英語

中国語

韓国語

『あつべつ食の文化祭』外国語用のチラシ

■ **取組を通した生徒の変容**

- ・観光関連産業学習後に実施したアンケートの結果では、生徒の96.1%が「ホスピタリティに対する理解が深まった」と回答した。また、職業能力に関する調査では、「言葉遣いやマナー、身だしなみ」が上位に位置し、「コミュニケーション能力」の向上があることが分かった。

ここがGOOD！

#ねらいどおりの高い成果が得られている

■ **指導上の留意点**

- ・観光ビジネスに関わる探究的な学習活動を通して、育成を目指す資質・能力を具体化し、生徒が主体的に課題解決に取り組むことができるよう、学習内容の工夫を図ることが重要である。

郷土の歴史・文化に対する地域への情報発信

北海道小樽未来創造高等学校（生徒数429名、学級数11学級）

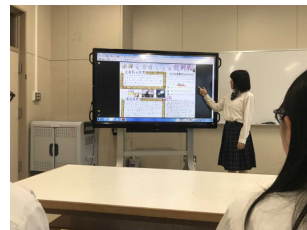
■ ねらい

- ・小樽の歴史や文化を学ぶことにより、生徒の地元小樽への郷土愛を育む。
- ・小樽の歴史や文化などに対する幅広い知識を有する、地域に誇りを抱く市民や産業人を育成する。

■ 実践例

○ 取組の背景

- ・小樽市は、北海道で唯一複数の日本遺産の認定を受けている街であるが、生まれ育った街である小樽の歴史や文化、文化遺産である建造物等が残った歴史的背景などについて、興味や関心がない生徒が多かったことから、地域に誇りを持つ産業人を育成するため、地元小樽の歴史を学び、地域の良さを知る必要があった。



○ 取組内容

- ・最初に授業では、3～4人のグループに分かれ、それぞれの視点でテーマを設定し、情報の収集及び整理・分析後、壁新聞を制作し、学校祭での掲示など、来場客や在校生に対する発表を行った。
- ・文化祭の終了後、活動のまとめとして、報告書を作成した。（科目「総合実践」において6時間配当）

ここがポイント！

#学校全体に取組を浸透させる工夫をしている



科目「観光ビジネス」で指導可能！

○ 地域（関係機関等）との連携体制

- ・高等学校OPENプロジェクトで年3回開催されている「地域みらい連携会議」での助言を取組の参考にした。会議では、小樽市民の地元に対する郷土愛や興味・関心の喚起に向けて、「日本遺産の認定が効果的である」などの助言があった。

■ 取組を通じた生徒の変容

- ・授業のまとめとして行った全体討論では、小樽の成り立ちや経済的な発展の過程についての理解を深めるとともに、現在の小樽に大きな影響を与えた先人たちの活動について、敬意を表す発言が見られ、地元小樽への関心が高まった。

[生徒の感想]

ここがGOOD！

#地域の歴史を学ぶことが、郷土愛を育むきっかけとなっている

- ・小樽市の歴史・文化を再発見することにより、街の魅力と誇りを感じることができました。これからは、語学をたくさん学び、外国人に対して小樽の素晴らしさを伝えていこうと思います。

■ 指導上の留意点

- ・歴史的な事実や背景の調査に重点を置きすぎると、事実の積み重ねに終始することとなるため、現在の小樽に影響を与えたものは何か、現存の建物や企業などが存在しなかった場合、自分たちの暮らしはどのように変わっていたかなど、生徒が主体的に思考を深めることのできる場面を設定することが重要である。

地域の水産資源を活用した観光資源の開発

北海道礼文高等学校（生徒数30名、学級数3学級）

■ ねらい

科目「生活産業基礎」において、礼文島の水産資源を活用したメニューや製品を開発するなど、地域性を生かした探究的な学習活動を通して、礼文島の地域振興に主体的に関わり、新たな価値を創造する力を育成するとともに、より良い地域社会を実現しようとする態度を養う。

■ 実践例

○ 取組の背景

- ・ 礼文島は、観光シーズンには大勢の観光客で賑う反面、オフシーズンは閑散としているため、地域の水産資源を活用した新たな観光資源の開発に取り組んだ。

○ 取組内容

- ・ 漁業士からの講話（礼文島の水産資源と創作料理の紹介）
- ・ 礼文産の昆布を使用した出汁の風味を調べ、どのような食材と合わせて料理を開発すれば良いのか考察する活動 **科目「商品開発と流通」及び科目「観光ビジネス」で指導可能！**
- ・ 調理実習における、礼文産の昆布を利用したメニューづくり
- ・ 礼文産の穴あき貝を利用したキャンドルの開発
- ・ 礼文産の昆布出汁と椎茸出汁は4：3の割合にするのが最も良いという研究結果をもとに、地元食材を使用したペペロンチーノ（うどん麺）を開発し、「シーフードコンクール」などの料理コンクールに出場
（科目「生活産業基礎」において40時間程度配当）

○ 地域（関係機関等）との連携体制

- ・ 宗谷地区水産技術普及指導所 礼文支所に漁業士を依頼し、料理に使用する包丁の研ぎ方についての講義演習の実施
- ・ 香深漁業協同組合から水産資源の提供



【礼文産の昆布からつくったジュレ】



【穴あき貝を利用したキャンドル】

ここがポイント！

#地域の人材を効果的に活用している

■ 取組を通じた生徒の変容

- ・ 地域をPRできる水産資源を生かした新しい商品を開発するため、新しい発想や視点で昆布などの水産資源の活用を考えるなど、新たなものを創造するためのプロセスを学ぶことができた。
- ・ 本取組を通して、地域の一員としての意識が明確になり、地域振興に貢献しようとする思いが高まった。

※生徒からの声

礼文産の昆布が持つ可能性を、調理実習などを通して知ることができたので、今後も研究を重ね、礼文島を代表する新たな商品を開発して島を活性化し、この先も皆が住みたいと思える島にしていきたいと考えるようになった。

#水産資源を活用した商品開発を通して、地域を活性化したいという思いが醸成されている

ここがGOOD！

■ 指導上の留意点

- ・ 地域の水産資源を活用したメニューや製品を開発し、地域の方々に向けた成果発表を通して、生徒のプレゼンテーション能力を高め、研究成果を地域に還元するとともに、外部機関が主催するコンクールを活用するなど、生徒の研究意欲の向上を図るための工夫が重要である。

地域に根ざしたグローバル人材の育成

北海道釧路商業高等学校（生徒数450名、学級数12学級）

■ ねらい

- ・体験を通じたコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等を身に付け、外国人とコミュニケーションを図ることができる地域を担うグローバル人材の育成

■ 実践例

○ 取組の背景

- ・国際ビジネス科の特色を生かし、釧路市を訪れる外国人に「おもてなし」ができる資質・能力を身に付け、今後の釧路市の地域経済を支えることができる、国際感覚が豊かな人材を育成してほしいとの要望があった。

○ 取組内容

- ・1年次（科目「ビジネス基礎」において12時間配当）
オリエンテーション、講演（国際交流・ビジネスマナー・東南アジア）、バス見学（おもてなし事業・バス見学）
- ・2年次（科目「総合実践」において18時間配当）
外国旅客船「おもてなし」出前講座、外国旅客船「おもてなし」事業、講演、旅行プラン作成Ⅰ、地域学習（釧路検定）
- ・3年次（科目「総合実践」において18時間配当）
外国旅客船「おもてなし」事業、講演（韓国・中国文化、ビジネスマナー）、旅行プラン作成Ⅱ

科目「観光ビジネス」で指導可能！

○ 地域（関係機関等）との連携体制

- ・外部講師による出前授業
国際交流の基礎的知識と心構えを学ぶ（釧路市）、外国文化を学ぶ（国際交流の会）、日本・釧路の文化を学ぶ（釧路国際交流の会）、ビジネス・マナー学習（北海道エアシステム）、地元の観光と経済、観光プラン作成（JTB）
- ・施設見学（阿寒湖鶴雅リゾート）
- ・外国旅客船「おもてなし」事業（国際交流の会）

■ 取組を通じた生徒の変容

- ・当初は言葉の壁に対して、消極的であったが体験を重ねることにより、自ら外国人に話しかけ、相手の出身地や釧路市の情報についてコミュニケーションを図るなど、積極的に行動するとともに、コミュニケーションを図るには、語学力はもとより、相手に伝えようとする気持ちが大切であることを学ぶことができた。

ここがGOOD！

#外国人との交流体験を通して、コミュニケーション能力を高めている

- ・釧路に関する学習を通して、自信と誇りを持って釧路を紹介することができるようになった。その結果、明確な進路目標を持ち、自ら進んで進路活動を行った。

■ 指導上の留意点

- ・組織的・計画的に取り組み、生徒の課題や目標を明確に設定する必要がある。
- ・出前授業や施設見学などで企業等からの支援を得るためには、担当者は関係機関や行政が主催する情報交換会などに積極的に参加して企業等との接点を持ち、信頼関係を構築していくことが重要である。

ここがポイント！

#関係機関との連携を円滑にするため、積極的につながりをつくるよう取り組んでいる

- ・観光に関する体験を通じた学習活動は、景気や政治情勢、天災などに左右されやすいため、汎用性のある年間計画の作成など、臨機に対応するための備えが重要である。

本事例集の編集には、高校教育課において以下の者が担当した。

課長	藤村誠
主幹	諸橋宏明
主幹	渡辺淳一
主査	八丁正樹
主査	古御堂徹
主任指導主事	石田暁
主任指導主事	今井真
指導主事	長谷川智人
指導主事	峯田雅大
指導主事	岩館良伸

探究的な学習活動の実践事例集

編集 北海道教育庁学校教育局高校教育課
060-8544 札幌市中央区北3条西7丁目
TEL 011-231-4111
内線 35-728